

# あびこの文化

発行人 大野 美崎  
我孫子市 高野山  
250-23  
04(7182)  
0861

## 五団体共同企画講演会実施報告 我孫子市の「多様性ある博物館」を考える

平成28年4月、五団体(市史研究センター、あびこのガイドクラブ、我孫子の景観を育てる会、ふるさと我孫子ガイドの会、我孫子の文化を守る会)は「郷土資料センター設立推進会」をスタートさせました。設立趣旨・目的は「郷土の歴史遺産を保存・展示する場所を新たに創ること」です。周辺地域を見渡しても唯一、我孫子市だけ博物館、資料館、資料センターと呼べるもの、またそれに類する施設はありません。五団体では推進会スタート以降、我孫子市の担当部署や星野市長、また市内の住民の方々に折に触れその必要性を訴えてきました。一方、我孫子市は財政的な面でも早急にはこれに対応できる状況にはありません。

今回の講演は5月に市史研の歴史部会で行われたものに、さらに内容を充実して五団体会員向けに企画されたものです。

日時 10月21日(金) 13時～15時

場所 アビスタ第一学習室

講師 宗岡 恒雄氏(市史研究センター会員)

演題 我孫子市における「多様性ある地域博物館」を

考える

(以下講演概要)

### 第一部 博物館について

博物館は、「資料の①収集・保存②調査・研究③展示・活用④教育・普及の4つの活動を一体的に行う施設であり、実物資料を通して人々の学習活動を支援する社会的施設である。」と定義されている。

博物館を巡る最近の動き、博物館が抱えている課題、さらには入館者を増やす取り組みなどを示しな

がら、熊本市立博物館のリニューアル時の基本計画(2012・3)と和歌山県立博物館の「触つて読む図録」のユニークな取り組みを事例研究として紹介した。

### 第二部 我孫子における博物館の試論

#### 1. はじめに

我孫子市で歴史博物館の検討着手(五団体のPR活動も影響?)

#### 2. 我孫子市「地域計画」

「令和2年12月に開催された文化庁文化審議会文化財分科会において、我孫子市を含む7市町の「文化財保存活用地域計画」を認定することが文化庁長官に答申され、この答申に基づき我孫子市文化財保存活用地域計画が文化庁長官より認定された。認定が開始されてからの認定件数は23件、千葉県のみ自治体としては、銚子市と並び県内初の認定となる。計画期間は7年間(令和3年度から9年度とする)。

※文化財保存活用地域計画とは、文化財保護法が改正されたことにより制度化されたもので、市町村が作成する地域における文化財の保存・活用に関する総合的な計画。この計画は地域の歴史文化の特性に基づき、文化財の保存・活用のための目標や具体的な事業等を定めて計画的に取り組みを進めていくことで、計画的かつ継続的な文化財の保存・活用の促進を図る。

我孫子市には地域の歴史や文化を語るうえで重要な文化財が数多く残っている。また文化財指定の有無にかかわらず地域にとって重要な文化財を「我孫子遺産」と呼び、保存・活用しながら次世代へと継承していくことにしている。一方で市内各地に残る我孫子遺産は、地元の方であつてもその存在があまり知られていないものもあり、担い手の高齢化や自然災害により、次世代への継承が危ぶまれているものもある。こうした状況の中で我孫子遺産を守っていくためには、地域の方にその存在を知っていただくことが重要だと考える。「以上、市のホームページより転載」

我孫子遺産の展示施設について現在、市の歴史や文

化を網羅した博物館・資料館のような展示施設はない。市内にある遺産を「展示する常設施設は「湖北郷土資料室」のみである。この施設は湖北行政サービスセンター2階の空き部屋を使用した限られたスペースのため、湖北地区に限定した展示内容となっている。

#### 3. まず考えたこと

博物館は「米百俵の精神」で実現したい。また博物館の永続的な自立を可能とするサポート体制を構築する必要がある。

#### 4. 我孫子市の特徴

自然・文化・歴史資産に恵まれ、東京まで40分に位置するポテンシャルに富む住宅都市である。

#### 5. 目指す博物館の私案

大切なことは、我孫子市民が「自分たちの、私たちの博物館」と日常的に親しみ集い、いつでも子供たちの声が聞こえるような博物館になること。そのためには狭いジャンルの専門性の高い博物館であるより、多くの市民の幅広い関心に応える間口の広い博物館が求められるのではないかと、ここで私案を示す。

(1) 多彩な市民の関心に応える「多様性ある地域博物館」の実現

① 我孫子ならではの特性を活かした博物館

② 一過性の利用から継続的な利用を促す博物館

(2) コミュニティセンター的な機能を

① 老若男女の市民が親しみ集う(日常的に子供の声が聞こえる)市民参加の博物館

② 進化したカルチャーセンター的な機能と、サポートの育成機能を備えた博物館

(3) ビジターセンター的な役割も

① 外部者も楽しめる利便性ある博物館

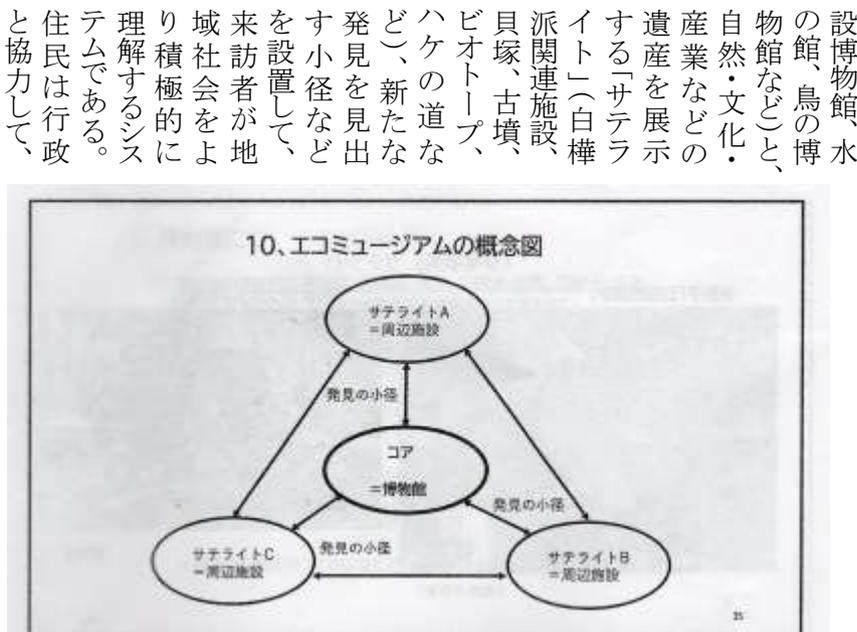
#### 6. 博物館を支えるエコミュージアムの提案

その「多様性ある地域博物館」をサポートする体制として「エコミュージアム」を考えた。

※「エコミュージアムとは「エコロジー」と「ミュージアム」からの造語。

「ある一定の文化圏を構成する地域の人びととの生活と、その自然・文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」と定義。

すなわち住民参加を原則として、普通の博物館と違つて対象とする地域内に「コア」と呼ぶ中核施設(新設博物館、水の館、鳥の博物館など)と、



自然・文化・産業などの遺産を展示する「サテライト」(白樺派関連施設、貝塚、古墳、ビオトープ、ハケの道など)、新たな発見を見出す小径などを設置して、来訪者が地域社会をより積極的に理解するシステムである。住民は行政と協力して、自分の居住する地域の自然・文化・歴史資産を「サテライト」として運営、行政は専門家と施設と資金を「まると博物館」として自然遺産・文化遺産・歴史遺産を再発見するとともに、市民が学習・保存・展示活動を通じた地域おこしにも通じる。

7. エコミュージアムの事例

① 事例1 岩手県朝日町エコミュージアム

朝日町の自然環境と人間によって醸成された、自然と人間との関わり合いを伝統と産業社会の発展の中でとらえ、それを表現している。時間の中に生きる人間を表現する博物館。自然を含めた生活空間を演出し、表現する博物館である。

② 事例2 神奈川県平塚市の金目エコミュージアム

金目地域全体を一つの博物館と見立て、地域内の歴史、文化、自然等の地域資源を、住民自身が地域の学芸員として調査、研究、展示、活用する「エコミュージアム金目まるごと博物館推進委員会」が平成19年正式に発足した。

③ 事例3 館山まるごと博物館

魅力的な自然遺産や文化遺産を再発見するとともに、市民が主役となって学習・研究・展示や保全活動を通じて、地域づくりをすすめている。NPO法人安房文化遺産フォーラムは、房総半島南端の館山で、歴史文化遺産の調査研究と保存・活用を通して、「エコミュージアム」まちづくりを進めている。

◎ むすびとして

博物館の新設とそれをサポートするエコミュージアムの取り組みは①自分が生まれ育った街を、時間的にも空間的にも正しく理解し②歴史遺産を誇りうる文化財として後世に伝え③自らによる街おこしの実現を図るためにも意義ある取り組みと思われる。「担い手の柱として先導役を期待したいシルバー層は「厚く」、その心は「熱い」と考えたい」と締めくくった。

中身の濃い講演の全内容は限られた紙面では伝えきれないが、大変示唆に富んだかつ実現可能な内容であり、提案である。我孫子市の関係者をはじめ多くの市民の方々に聴いて貰いたいと思った。

星野市長はかねがね博物館機能の必要性を言われているが、前提として市民が必要であるとも加えている。今回のこのような講演を何度も重ねながら博物館(博物館機能)の早期の実現を切に望む。(美崎)

連載③

稲村雑談寄稿—我孫子の文化を守る会へ—

我孫子市白樺文学館 学芸員 稲村 隆

(3)文化空間「我孫子・白樺派」—原田京平、三岸好太郎、三岸節子、甲斐仁代、中出三也—  
「雲母なす朝霧こめて手賀沼は眠れるままに船渡すかも」1921(大正10)年我孫子に移住した頃、原田京平が詠んだ短歌である。

原田は1895(明治28)年、静岡県磐田郡上阿多古村(現浜松市天竜区)に生まれた。旧制浜松中学校を中退し、洋画家を志し上京、日本美術院洋画部、春陽会と所属し、1936(昭和11)年1月に肝臓がんのため40歳で死去した。我孫子には1921(大正10)年10月〜1928(昭和3)年3月まで滞在していたと思われる。

白樺派として我孫子に最後まで住んでいた志賀直哉とは、滞在時期が被っており、志賀の全集の日記を見ると原田と志賀の交流の様子が描かれている。

原田の資料については、連載1回目でも少し紹介しているが、改めて概要を説明すると「遺族より、2015(平成27年)に寄託され、2018(平成30)年に寄贈となった資料が原田京平関係資料である。総数は約500点。

原田の油彩、水墨などの美術資料をはじめ、妻睦の詩、京平の短歌などの文学資料、書簡、京平が収集した民藝、民俗関係資料などが含まれている。

この資料をどのように我孫子の近代史に位置付けていくか、これが私の文学館でのライフワークとなった。そこで創り出した概念が、文化空間「我孫子・白樺派」である。よく文士村という表現が用いられるが、残念ながら、「白樺文士村」といつてしまうと原田を位置付けるには、白樺派として同人参加したわけではない、少し離れてしまう。「我孫子文士村」というのも歴史上の位置づけとしては良いかもしれないが、現代に通じる位置づけをしたいというところから、文化空間「我孫子・白樺派」といいとこどりをしたわけである。

したがってこの概念が正しいとか、間違っているとかではなく、限りなく現在にも続く文化発信の基礎が、白樺派が我孫子に来たことよって花開いたというある種の「ものがたり」(カタチ)を作ったわけである。

話を画家の方に戻そう。そもそも画家たちは何故集まったのだろうか。匠秀夫「三岸好太郎 昭和洋画史」の序章(1992)によれば、1918(大正7)年伊之助が描いた我孫子の風景画が第5回二科展二科賞受賞されたことを契機に「我孫子は青年画家のスケッチ地として賑わった」と記している。原田が我孫子にやってきたのは1921(大正10)年であるから、その影響を受けたのかもしれないが、詳細は定かではない。しかし碓との交流があったことは、資料群から書簡が残っていること、遺歌集の装幀を碓が担当していることからもうかがえる。

また1923(大正12)年関東大震災をもう一つの契機として、都心から離れて、画家たちはスケッチ地を求めており、そこで我孫子がその地の一つになったようである。

『我孫子市史』にも口絵が掲載されている三岸好太郎、そして妻となる三岸節子、また現在白樺文学館で開催中の展覧会に登場している甲斐仁代、中出三也である。その他にも三岸と交流のあった俣野第四郎など我孫子ゆかりの画家は割と多い。名前を挙げた画家たちは、春陽会関係者が多く、春陽会は、日本美術院洋画部と、岸田劉生率いる草土社が合流してできたものであり、白樺派と縁がないわけではない。

ではなぜ今まで我孫子において展覧会などで大きく取り上げられることがなかったのだろうか。それはひとえに、実物としての作品が我孫子市所蔵のものが皆無といつていい状態だったからである。三岸夫妻の作品は、それぞれ出身地である北海道、愛知に美術館があり、わずかながら我孫子風景の作品は所蔵され、俣野の作品も北海道立近代美術館で我孫子風景の作品所蔵を確認出来ている。では借りてくればいいではないかという声が聞こえてくる。資料借用の場合、温度湿度管理、照度の調整など展示環境の整った設備が

必要なのである。残念ながら、白樺文学館は、そのような展覧会を想定した造りにはなっていない。だからこそ今まで開催されてこなかったのである。そのため、文学館寄託、寄贈となった原田の資料を使うことで、ようやく展覧会開催、情報発信へとこぎつけたのである。しかしながら絵画資料のほとんどは、修復をしなければ展示することは難しい。着任以後、少しずつ修復は進んでいるが、それと同時に、収蔵庫スペースの問題も発生してきている。今まで、額縁に入っていない、キャンバス布だけになっていた作品が木枠をはめ、額縁に入り、箱に収められているのだから当然そのスペースは増えていく。

折に触れて引用している『我孫子市文化財保存活用地域計画』には、文学館のリニューアルも位置付けられている。第4章②「4つの「ものがたり」を通して我孫子遺産を活用する取り組み」②「まちのものがたり」②大正時代のまち「文化人の集う別荘地」ではつぎのように「現状・課題」を述べている。

「志賀直哉邸近くにある白樺文学館は、白樺派の資料や作品を多く集めた施設であり、市内外を問わず来訪者が多いが、設立当初は私設で住居機能を一部備えた文学館だったこともあり、展示スペースや収蔵庫として使用できるスペースが限られている」

そしてその「活用方針・取り組み」として次のように述べている。

「中核施設として我孫子市域の大正・昭和の歴史と文化についての常設展示と白樺派を中心とした企画展示が出来るようリニューアルを行い、展示スペースの増設や適切な環境で展示物を保存活用するために収蔵庫を増設する」

何のために資料を集めるのか、何が我孫子にとって重要な資料なのか。それらをどのように活用することが求められているのか、すべては我孫子の文化をどう考えるかということなのではないだろうか。結局は、文学館そのものをどう考えるかということである。またそれは我孫子の近代史、現代史をどのように位置付け、理解するのかがということにつながる。私は

そういう意味で、我孫子にとつての白樺派、我孫子にとつての白樺文学館というのを考え続けてきたのである。「我孫子の文化を守る会」の皆様はどう考えるのだろうか。続く。

~~~~~

## (寄稿) 我孫子宿 水戸道・成田道追分保全活動

### 「チームねのかみ」の結末

関口一郎

#### 事業完了報告会

本年の9月13日、標記水戸道・成田道「追分道標」説明板の設置を終え、9月27日に現地において報告説明会を持つてひとまずの完了を見た。この報告会には星野市長・丸教育長をはじめ、市教育委員会の関係部署の各位、また地元自治会・商店会の主要なみなさん、さらに一般市民を含め、50名に近い方々にこの狭い場所に参列いただいたことを「保存会」としては篤く感謝申し上げなければならぬ。

渡辺保存会会長が司会進行を担い、市長からは、市民を主体としたこのような自治組織での文化財保全の機運の拡がりをさらに期待したい旨のご挨拶があった。続き、歴史文化財担当の今野学芸員が、この追分道標の持つ江戸期交通史上の重要な位置づけを説明された。

関口は我孫子でも最古の元禄4年道標が確認されたこと、「これより右布川海道」「従是左 水戸海道」と中世から使われている「海道」の表記は龍ヶ崎でも絵図にあることにも触れ、取手宿の経路が開通して直ぐの道標であり、貴重な文化財であることを訴えた。

渡辺は最後に、地元愛によるみんなの力の結集が今日を迎えることができたことを述べ、まとめとした。

考えてみると、令和元年(2019)12月3日に当該箇所ランドマークであった山桜の木などの樹木が伐採されてから今日まで、2年10か月、足掛け4か年という歳月が過ぎた後の報告会であった。



いみじくも市長のご挨拶でも触れられた（ここに手を付ける仕事なら職員を辞めさせていたください）という職員の反応におどろいたと冒頭話されたが、長年、地元では手を触れられない場所であったことも事実である。

歴史的には当該地は重要な場所であることは認められながら、道標は倒れたまま、半分埋もれたままになっていた。道標の数がこれだけ集まっていることも事例としては珍しいことである。我孫子市史金石文篇（全3巻）でも7基ほどの道標が認められていた。

「ここを史跡文化財として認めること、そのための文化財調査の対象にしてほしい」と市の担当部署には訴えていた（経緯は我孫子市史研究センター会報第245号参照）。前述の事情や当該地が県の管轄であることもあつてか、市は動いてくれなかった。

「保存会の立ち上げと募金のお願い」

保存会ができたのはすぐにはなかったが、発起人は渡辺一彦・吉池紀夫・浅野康子（敬称略）・関口一郎の4人。渡辺と関口は10年以上前から知り合っていた。渡辺は寿商店会の会長。関口は我孫子市史研究センター（以後市史研）に所属し、『我孫子の地名と歴史』わが町の字誌（あざし）をつくるため、あちこちを歩き回っていたときに渡辺に出合った。土地っ子の渡辺は教師の経験もあり、郷土を愛し、我孫子の歴史をよく勉強していた。夕刻時店頭に寄ると話は弾みいつも1〜2時間は過ぎていた。土地っ子ではない関口はいつも快い刺激を受けていた。当然、我孫子第一小前の手の付けられない道標も、なんとかしなくてはと常に話題

にしていた。

前述の12月の初旬、渡辺が沈痛な面持ち関口の玄関に立った。「知っていますか道標のところを！」。いつもバスで通っている関口は樹木の伐採に気が付いていなかった。関口は早速市史研の会報で、「史跡・文化財の保全をみんなで!!」と訴えた。渡辺は柏市にある所轄の県土木事務所で、当該地域が道路事情で移転等の変更をすることはないか確かめに行った。すぐに工事等の計画はないことの確認はできた。

渡辺は、このような道標の整備を他地域ではどう扱っているかを、仕事の合間を縫いながら見て回った。

関口は子の神台自治会副会長で自治会報「ねのかみ」の編集も担当する浅野の声掛けもあり、「我孫子の歴史にふれる会」のテーマでとくに「寿・子の神地域の歴史」を語る機会をつくってくれた。しかし令和2年3月開催予定の講演が、思いもよらぬ燎原の火のごときコロナ禍で中止。下火となった翌年3月に講演の再開が企画されたが、これもまたコロナ禍で中止となった。

やむなくというか、会報の紙面でそれを実現することになり、令和3年4月発行の153号に、「講演会に替えて」として「我孫子宿の繁栄と重要な歴史遺産の分岐点（追分）」と題して、追分道標の重要性を説いた。次号・次々号にも連載をした。この会報は自治会員全員の目に触れることになるわけで、その後の自治会が取り上げる保存工事の寄付金の依頼に際して、多少の意識付けを果たすことができたかもしれない。

そうした動向と併行して、渡辺は県土木事務所に行き保存整備可能な感触を得、令和3年4月2日、新任早々の市教委、文化・スポーツ課（以後文化課・辻課長を渡辺と関口は訪ね、三叉路（追分）と呼称することを双方で合意）の道標保存整備工事について、県の感触も含め、実行を要請した。それに対し、基本的にはOKであるが、予算については無理。しかし「説明板」については経費も含め市が担当するので、それ以外は市民サイドで負担して欲しいとの説明があった。

予測はされていたが、子の神台自治会の浅野、それ

に吉池も加わってもらい、「保存会は4人でのスタートとなった。吉池は子の神台自治会の理事でもあり、一級建築士である。保存会会長は寿商店会会長の渡辺に引き受けてもらい、文化課との窓口になっても良かった。

基金にクラウドファンディングも検討したが難しい。結局周辺の自治会、商店会、歴史・文化等の関係団体の力を借りるしかない。子の神台自治会は浅野、他の自治会・商店会は渡辺、関係団体・知己等は吉池・関口と。

吉池の参加は事業を大きく前進させる中核の任を果たしてくれた。文化課・県土木課・業者への説明資料例えば工事工程表・仕様、施工業者選定要件、工事に伴う道路占用申請書などの準備・作成など諸事万端であった。また土地っ子であり人望のある吉池は同窓・同級の知人、関係団体の仲間等から多くの基金を集めた。

浅野が担当する子の神台自治会では会長名で一口100円以上とし、全戸に回覧をした。なお、浅野は寄付者全員の名前と寄付額を記したタイムカプセルを道標の近くに埋蔵する案を披露し、実行した。

渡辺も周辺自治会・商店会の要項をつくり寄付をお願いした。自治会はそれぞれの事情があり、相当に苦勞し、次年度への持ち越しの自治会もあった。

関口も関係の団体、個人にお願いし、団体全會員への募金は時間的にも難しく、運営委員会や部会のメンバーには募金函や募金袋で集めた。

募金者への返礼品として、郷土史家・安齋秀夫氏（元市職員）撮影の写真集「昭和30年代の我孫子の風景」（8頁）を作成し配付したが、周辺の自治会などには有力な宣材として喜ばれた。

結果は150万円に近い浄財を集めることができたが、そのなかで子の神台自治会は半分に近い65万円を超える額を集めることができた。これはやはり昭和57年から季刊として年4回着実に発行している会報『ねのかみ』の存在が果たす意味は大きい。

工事の経緯

これまで述べてきたように諸般の事情から工事会社  
の入札も推薦候補3社からも2社の辞退があり、1社  
となった。ただ造園業の専門業者であることから、工  
事は比較的スムーズに推移した。寄付金の目処もつき  
令和3年12月10日に地鎮祭を行うことができた。チ  
バテレビ、千葉日報も取材に来てくれ、文化財保存の  
貴重な事業であることが広報された。

工事のプロセスは、まず道標を他のスペースに移し、当  
該箇所を整地し、防草シートを敷き、その上に砂利で  
整えなければならぬ。ただ季節は年末に入り、特に  
交差点近い道路での工事は中旬から禁止になり、作  
業は来春廻しになってしまった。令和4年1月7日、道  
標やそれに関わるすべての石材を重機で吊り上げ、ト  
ラックに載せて、湖北小学校の校庭に移した。校庭全  
体に敷かれたシートの上に、番号を貼り付けた本体  
や台座を置いていく。横にするとかなりの面積になる。



我孫子宿 水戸道・成田道追分



一種の養生で、この際刻まれていた文字をできるだけ  
正しく確認しなければならぬし、割れている箇所は  
接着しなければならぬ。湖北小学校庭での調査には、  
文化課今野、手嶋、柏瀬の担当職員、市史研は岡本、  
東の両氏等にも参加いただいた。

一方2月の下旬には追分の整地もかなり進み、道標  
の設置位置についての検討を行った。方法として段ポ  
ールで道標の雛形をつくり、位置確認を検討したが、  
最終的にはこれまでの中心的位置を占めていた文政  
13年(1816)の不動標を中心に置き、最前列に最古  
の元禄4年(1691)の庚申道標を持つてくるものが順  
当であると決まった。それを核として年代順は位置す  
るのが適正であることに落ち着いた。

2月14日に湖北小から追分の現地に道標を運び、  
計画通り配置を行い、砂利を整い、東のコーナーには  
タマリユウも直栽し、近くにタイムカプセルも埋め、2

月19日に道標の保存工事は一応の完了を見た。  
なお、工事全般を通して、市教委文化・スポーツ課  
の辻課長をはじめ、担当職員みなさんの全面的なご  
協力と指導・助言をいただいたことに篤く感謝申し上げ  
たい。

放談くらぶ 荒井茂男氏講演

「我孫子の地名あれこれ」を聴いて

村上 智雅子

おちこちの山茶花が咲き始めた一〇月二二日。ア  
ビスタ第二学習室の明るく広い部屋で、一つの机に  
二人掛けの設定で満室のもと、講演は行われました。  
講師の荒井茂男氏は、我孫子生まれの我孫子育ち  
でしかも我孫子市役所で部長職まで勤められた方。  
その上我孫子や白樺派に関する知識は人一倍お持  
ちの方です。氏は落ち着いた語り口で、自筆の資料  
を交えた映像も添えて朗々と話されました。

(以下講演要旨)  
・地名とは何か

まず地名とは、文字が伝わる四世紀後半以前から  
人の営みの中でその土地の「自然」や「信仰」、田  
畑などの「耕作」や「交通」「集落」に由来し命名さ  
れたものです。

歴史的に見ていきますと、奈良時代の和銅六年  
(七一三年)『風土記』編纂の勅命で、国名郡名を  
なるべく良い字を用いて、しかも二字で表わすよう  
に制定されました。和銅八年には国郡郷里制が定め  
られ、下総・上総・常陸・武蔵などの国名、それか  
ら、千葉・印旛・葛飾などの郡名が表記されました。

さらに豊臣秀吉の天正二〇年には、「太閤検地」  
で「字(あざ)」が全国的に付けられるようになり  
ました。字の集まりが「村」で、これが江戸幕府に  
引き継がれました。

また、明治政府による地方制度の確立で「大字(お  
おあざ)」が誕生し、明治二二年の市政・町村制施

行で、我孫子町・湖北村・布佐町が誕生。昭和三〇年にはこれら二町一村が合併し我孫子町が、昭和四五年には我孫子市が誕生し、今年で我孫子市制五二年目となりました。

・我孫子市の地名の由来

次に我孫子市の地名の由来は諸説ありますが主だったものを紹介します。

一、古代の氏(うじ)や姓(かばね)に関係した説で、当時は天皇に肴や鳥などの食料を貢ぐ職業の氏族の名がアビコで、その所有地にこの名が付けられました。全国にアビコという地名が多いのはこの由来によるもので、自治体では我孫子が全国唯一となります。

二、古代の官職大膳部に属し、魚貝を貢ぐ仕事の作業「網曳(網引)」のあびき↓あびこに転じたという説。

三、外国語由来説として、①アイヌ語の ap-kotan(釣り針+村)という漁業関係の地名が訛つたもの。②韓国語でアビコ息子、コ息子で、我が息子の子、すなわち自分の孫という最近出てきた説。など色々あります。

現在は、一つ目の古代の漁業に関係した氏族の名前であったという説が有力です。手賀沼と利根川に挟まれた土地、我孫子に相応しい説です。

・我孫子の地名あれこれ

最後に、我孫子の地名の由来をいくつか列挙してみます。まず久寺家は、平将門の重臣・久寺豊後守(くじぶんごのかみ)が住んだ所という伝説と古代の税関係の役所の「公事」があった所。「つくし野」は昭和五〇年住居表示で、我孫子・根戸・久寺家の一部が新しく名付けられました。また「白山」「本町」「寿」は昭和四二年の住居表示で、以前の大字我孫子が分けられて命名されました。「並木」は昔「天子社」があり、そこに松並木があったため名付けられ、「若松」は昭和三五年に「東洋のディズニールランド」を目指して沼を埋め立て、その後住宅地に転用され、縁起のよい名前が付けられました。

「中峠」は村境・標(ひょう)峠という説と、土手に囲まれた小域の中央という説があります。「布佐」は利根川に面し「麻」がよく育つた所で、この名が付けられました。

地名は、その土地の地形や歴史に関わり命名され今日に至っています。こうして見ていくと、改めて自分の住まう土地に興味と愛着が湧きます。

以上、二時間でも足りないほど内容豊かに話され質疑応答も短い時間ながら多く交わされました。参加者のおひとり、私の友人のご主人加藤直道氏から好意的なメールを頂いたので、お伝えします。

「荒井氏の若い頃からの研究の成果を入れられた興味深い講演でした。多くの受講者が参加された素晴らしい会でした。」

「美手連」の活動について

牧田 宏恭(会員)

例年、年末に開催される「手賀沼統一クリンデー」が、来月我孫子地区(12月4日)に近づいた。

クリンデーの行事は美手連(正式呼称:美しい手賀沼を愛する連合会)が主催して、手賀沼を取り巻く我孫子、柏、印西、白井の各地区で実施される。この行事は、手賀沼の自然を大切に、より良い環境の保全を目的に、各地域が同時に手賀沼の周りの清掃を市民参加のもと実施するものだ。

手賀沼は、その水質(COD値:化学的酸素要求量)が、「全国湖沼のワースト1」になる不名誉な状況が平成12年度(2001年度)まで25年間続いた。平成12年には、水質改善や用水のために開設された「北千葉導水場」が稼働開始している。

「美手連」は、このころ平成7年12月に発足した。当「我孫子の文化を守る会」も美手連の会員である。

美手連の所属団体(会員)は19団体にもおよび、手賀沼流域を構成する地域にて活動している。

その活動は「手賀沼とともに生きる手賀沼流域(※)」

の自然・生活環境のより良いあり方を学習し、美しい手賀沼をよみがえらせることを目的とする」とある。



その事業は、上記の目的を達成するために、

1. 学習会の開催、
2. 情報の収集・交換および提供、
3. 手賀沼の浄化、環境保全・整備についての提言、
4. 手賀沼浄化の達成および環境保全・整備について、市民および関係機関との連携強化、
5. 手賀沼浄化のための実験及び事業、
6. その他目的達成のための事業となっている。

「手賀沼統一クリンデー」もその事業の一つである。

(※)手賀沼流域とは、手賀沼ならびに沼に流入する主な河川(大堀川、大津川、染井入落)と沼から利根川に注ぐ(手賀川)、ならびに下手賀沼に流入する主な河川

(金山落)、下手賀沼から手賀川に注ぐ(下手賀川)、下手賀川に途中から流入する(亀成川)が上述の(手賀川)に合流する地域で、それらの湖沼・河川を含む地域を言う。流域は「我孫子市、柏市、流山市、松戸市、鎌ヶ谷市、白井市、印西市」の7市にまたがる144平方キロメートル(除く沼湖面6.5平方キロメートル)の範囲。流域人口54万人超(2021年)である。(図1参照)

流域とは、その地域に降った雨水が水系に集まる大地の範囲・領域を言い、行政区による領域ではない。

美手連を構成する団体は、アイウエオ順に「我孫子市消費者の会」「我孫子青年会議所」「我孫子の景観を育てる会」「我孫子の文化を守る会」「我孫子野鳥を守る会」「NPO法人アルバトロスコットクラブ」「大津川をきれいにする会」「大堀川の水辺をきれいにする会」「岡発戸・都部の谷津を愛する会」、「NPO法人亀成川を愛する会」「N



愛する会」「N

PO法人せつげんの街「我孫子、柏、鎌ヶ谷、流山の各市・自治労働員組合」「手賀沼漁業協同組合」「手賀沼水生植物研究会」「流山市立博物館友の会」「船戸の森の会」である。

美手連は「手賀沼流域フォーラム」実行委員会の

事務局」を担い、「フォーラム」から調査事業の委託を受け、学識経験者や行政と協働して取り組み、流域の皆さんに「手賀沼の魅力」「手賀沼の課題」を伝え、環

境保全活動への参加」を呼びかける事業を行っている。「手賀沼流域フォーラム」は手賀沼流域の市民活動団体と流域7市、手賀沼水環境保全協議会で実行委員会を構成し、市民が主体となり行政と協働で事業を行っている。流域の市民の皆さんに手賀沼について知識



を深め、沼の水質改善や環境保全を共に進めるため、流域各地域の市民活動団体が自然観察会、里山散策、史跡探訪などを企画・実施、情報の共有化にも力を入れている。

委託を受けた「美手連」の現在の調査事業とは、①手賀沼のハス・ヒメガマ・マコモ調査、②手賀沼のナガエツルノゲイトウ・オオバナミズキンバイ繁茂調査、③大津川支流のオオカワジシヤ調査・駆除、④手賀沼の魚類・貝類・プランクトン調査である。最近は、①に関し、沼の沼南側に広大に繁茂していた「ハス」の突然ともいえ

る消滅、②に関し、大津川流入河口付近、沼の各所に設けられた植生帯(高野山新田など)内およびその周囲などの外来水生植物調査が取り上げられ、関連して「都部谷津における外来水生植物の生育状況の観察・駆除」「手賀沼公園ふれあい護

岸の外来水生植物の駆除実験」などが続けられている。写真1は「ナガエツルノゲイトウ」、写真2は「オオバナミズキンバイ」、写真3は「高野山新田・植生帯付近の外来水生植物の繁茂状況を示す。

「手賀沼流域フォーラム」の企画として、構成団体による「自然観察会」「各所ウオーキング」「川巡り」「野鳥写真展」「消費生活展」教材づくり」等々工夫を凝らした催しが毎年活発に行われている。

かつての手賀沼が、緑に包まれ、水質にも恵まれ、多くの野鳥が飛来または留まり、水草水中植物・ガシヤモクなどが生育していたころの自然を呼び戻したい。そして、自然を呼び戻すために「美手連」の活動が、市民の参加を呼び、的を射たタイムリーな行政による諸施策も多いに期待したい。以上



## あびっだより103号

## 「新田次郎が我孫子で過ごした五年間」

村上 智稚子

大正時代、我孫子で志賀直哉や柳宗悦が新婚生活を送り、子を育て創作に励んだことは多くの人が知っています。しかし、昭和に入ってから新田次郎も我孫子で新婚生活を営み子を育て「ラジオゾンデ」という科学書を書いたことはあまり知られていません。

新田次郎の本名は、藤原寛人。後年新田次郎なるペンネームを付けるまでは、藤原寛人と表記します。昭和十三年春、気象庁の役人として富士山観測所から布佐気象送信所に転勤して来ました。この送信所は当時の岡田武松の尽力で創設されたもので、この転勤は岡田の一番弟子である伯父藤原咲平(岡田の次の中央気象台長となる)からの任命によるものでした。寛人は学生時代から岡田武松の隣の官舎にいた伯父藤原咲平の家に寄宿していましたので、岡田は旧知の敬愛していた大先輩ということになります。

「この出張所へ転勤してから結婚するまでの一年間が私の人生で一番よく勉強した時期であった」『白い花が好きだ』と寛人は後年述べています。その年の冬疑似赤痢で弱気になった時見合い話が持ち上がり、トントノ拍子で両角といと結婚することになりました。

藤原家は諏訪藩に仕える郷士であり、祖父は上諏訪町長をした家柄で、一方両角家は父が小学校の校長を務めていましたが農家出身であるため、周囲からは「玉の輿婚」と言われました。実直で山好きで努力家の寛人と高校時代ベスタロッチに心酔し、国語教育で有名な大村はまに教えを受けた意志の強く忍耐力のある両角とい。この二人の布佐での生活については、後年作家となった新田次郎と藤原てい書いた短文がありますので、(講演)当日田中由紀さんの朗読で紹介いたします。

また、この頃のこととは当時寛人と同じ送信所に勤めておられた布佐の竹内文子さん(星野七郎氏姪)から

以前私が岡田武松と新田次郎についてお話しした折、お電話を頂きお話しを伺うことができました。その上、寛人が送別会などで映した写真三葉と、竹内さんのご主人(同じ送信所勤務)の描かれた送信所のスケッチなどを頂きました。また、延命寺の足立俊領氏からは藤原寛人著の『ラジオゾンデ』(昭和一七年刊行、はしがきが岡田武松、藤原咲平)の本も見せて頂く機会を得ました。

こうした貴重な資料を基に、布佐での二人の生活を思い描き、後年各々作家としてペンを持つことになった原体験―勝ち気な寛人とていが時に喧嘩をしながらも相手の領分と子供を大切にしながら生きた―我孫子での四年間に光を当ててゆきたいと思います。

当日は、岡田武松の兄の孫である岡田りせ子さんに、祖母から聞いたという藤原寛人としてのお見合いの折のエピソードやりせ子さんの結婚式の媒酌人となったおふたりの話など、短い談話もしていただく予定です。

「放談くらぶ」で村上氏の講演を予定

日時 12月11日(日) 14時〜16時

会場 アビスタ第二学習室

## (プロジェクト報告)

## 百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

## 今月の歌(恋の歌その18)

あらざらむ この世のほかの 思ひ出に

今一たびの 逢ふこともがな (56)

## 【現代語訳】

もうすぐ私は死んでしまうでしょう。あの世へ持っていく思い出として、今もう一度だけお会いしたいものです。

後拾遺集の詞書には、「心地(こころ)例ならずはべりけるころ、人のもとにつかはしける」とある。

歌の通り、病気で死の床に就いている時に、心残りを歌に託して男のもとに贈ったということ。

## 【語句】

【あらざらむ】「あら」は動詞「あり」の未然形で「生きていく」という意味。「む」は推量の助動詞「む」の連体形で、全体で「生きていないであろう」という意味になる。

【この世のほかの】「この世」とは「現世」なので、「この世の外」は現世の外の世界、つまり死後の世界。【思ひ出に】「来世での思い出になるように」という意味。【逢ふこともがな】「逢ふ」は、男女が逢い一夜を過すこと、【もがな】は願望の終助詞で「〜であつたらなあ」と、実現が難しい希望を語る。

## 【作者】

和泉式部(いずみのしきぶ。生没年未詳)、1000年頃の人で、越前守大江雅致(おおえまさむね)の娘。最初の夫が和泉守・橘道貞(たちばなのみちさだ)だったので、和泉式部の名前と呼ばれるようになった(このとき生んだ娘が、百人一首にも登場する小式部内侍)。

平安時代の代表的歌人で、自分の恋愛遍歴を記した「和泉式部日記」は時代を代表する日記文学となっている。長保元年(999年)頃までに和泉守・橘道貞の妻となり、夫と共に和泉国に入る。後の女房名「和泉式部」は夫の任国と父の官名を合わせたもの。道貞との婚姻は後に破綻したが、彼との間にもうけた娘・小式部内侍は母譲りの歌才を示した。帰京後は道貞と別居状態であつたようで、冷泉天皇の第三皇子・為尊親王との熱愛が世に喧伝されるが、身分違いの恋であるとして親から勘当を受けた。紫式部は和泉式部を評して「和泉式部という人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ」と『紫式部日記』に記している。

為尊親王の死後、今度はその同母弟・敦道親王の求愛を受けた。親王は式部を邸に迎えようとし、正妃(藤原済時の娘)が家出する原因を作った。敦道親王の召人として一子・永覚を設けるが、敦道親王は寛弘4年(1077年)に早世した。寛弘年間の末、一条天皇の中宮・藤原彰子に女房として出仕。長和2年(1013年)頃、主人・彰子の父・藤原道長の家司で武勇をも

つて知られた藤原保昌と再婚し夫の任国・丹後に下つた。万寿2年(1025年)、娘の小式部内侍が死去した時にはまだ生存していたが晩年の動静は不明。

「晴より晴道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月」は、性空上人への結縁歌であり、式部の勅撰集(拾遺集)初出歌。仏教への傾倒が伺われる。歌の返しに性空から袈裟を貰い、それを着て命を終えた。

時の最高権力者・藤原道長からは「浮かれ女」と言われ、父親の雅致からは勘当。それにもめげず一条天皇の中宮彰子に仕え、藤原保昌(やすまさ)とも結婚した。

黒髪の 乱れも知らずうち臥せば

まづかきやりし 人を恋しき 『後拾遺和歌集』  
(黒髪が乱れるのもかまわずに臥せると、まづこの髪をやさしく掻きやつてくれたあの人が恋しく思われる)

関連狂歌

あらざらん未来のためのくりことに  
今一たびの逢ふこともがな

あらざらんこの世のほかの思ひ出に  
みめよき賀に逢ふ事もがな

あらざらんこの餌の残る思ひ出に  
今一汐に食う事もがな

一汐という製法は、新鮮なほど黒を開き、地元産天然塩を身にまぶし、一晚寝かせ熟成させた物。余分な水分は取り除かれ、少し引き締まった身は絶妙な塩加減になっている。

あられなき子もちの外のおもひでに  
今ひと度の風流もがな

関連川柳

あらざらん此の世の外の嫁いびり

(参考資料 ウイキペディア、「ちよつと差のつく百人一首」SNS版)

展示会見学報告  
聖徳大学所蔵名品展  
「百人一首とかるた」 書・描・遊



先ずあらためて百人一首について解説する。

小倉百人一首は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活動した公家・藤原定家が選んだ秀歌撰である。その原型は、鎌倉幕府の御家人で歌人でもある宇都宮蓮生の求めに応じて、定家が作成した色紙である。蓮生は、京都嵯峨野(現・京都府京都市右京区嵯峨)に建築した別荘・小倉山荘の襖の装飾のため、定家に色紙の作成を依頼した。定家は、飛鳥時代の天智天皇から鎌倉時代の順徳院まで、100人の歌人の優れた和歌を一首ずつ選び、年代順に色紙にしたためた。

定家が残した日記『明月記』(文暦二(1133)年五月二十七日の記述に「嵯峨中院の色紙形、ことさらに予書くべきの由、彼の入道(宇都宮頼綱、法名は蓮生)懇切なり、きわめて見苦しき事とい、ども、なまじひに筆を染めて之を送る。古来の人の歌、各一首、天智天皇より以来、家隆・頼経に及ぶとあること)から、これが事実と考えられている。(右下写真『明月記』の一部)＊蓮生：宇都宮(藤原)。成綱の男。俗名は弥三郎頼綱。治承二(1178)年〜正元元(1259)年、八十二歳。

為家(定家の子)の岳父として勅撰集歌収集の斡旋をするなど、終始定家と為家を庇護し続けた。

小倉百人一首が成立した年代は確定されていないが、13世紀の前半と推定される。成立当時には、この百人一首に一定の呼び名はなく、「小倉山荘色紙和歌」「嵯峨山荘色紙和歌」「小倉色紙」などと呼ば



れた。後に、定家が小倉山で編纂したという由来から、「小倉百人一首」という通称が定着した。

室町時代後期に連歌師の宗祇が著した『百人一首抄』(宗祇抄)によつて研究・紹介されると、小倉百人一首は歌道の入門編として一般にも知られるようになった。江戸時代に入り、木版画の技術が普及すると、絵エニア入りの「歌がるた」形態で広く庶民に広まり、人々が楽しめる遊戯としても普及した。

小倉百人一首の関連書には、同じく定家の撰に成る『百人秀歌』がある。百人秀歌も百人一首の形式で、

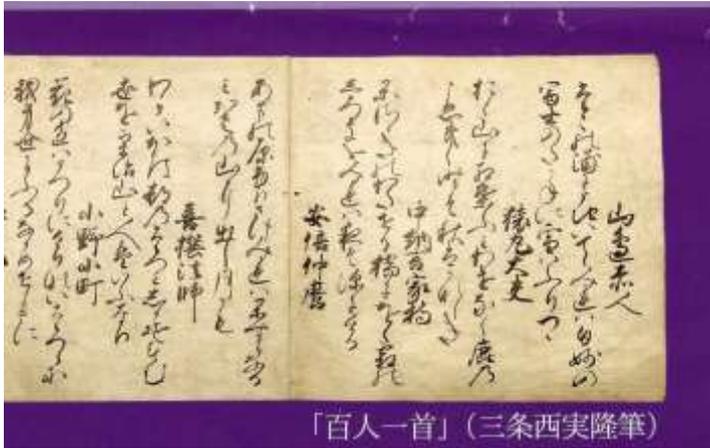


100人の歌人から一首ずつ選んで編まれた秀歌撰である。ただ『百人秀歌』には承久の乱で敗北して流罪にされた後鳥羽院・順徳天皇の歌はない。鎌倉幕府の意向を憚ったのではないかと考えられている。また『百人一首』との主な相違点は、九十七首は一致するが、四首は異なる。その結果『百人秀歌』が百一首であることも違いがある。

現在の有力な学説としては『百人秀歌』は藤原定家が、『百人一首』は藤原為家(定家の子)が選んだ」というのがある。よって百人一首は定家の撰ではない」とされている。

定家から蓮生に送られた色紙、いわゆる小倉色紙(小倉山荘色紙)は、蓮生の子孫にも一部が受け継がれた。室町時代に茶道が広まると小倉色紙を茶室に飾ることが流行し、珍重されるようになった。戦国時代の武将・宇都宮鎮房が豊臣秀吉配下の黒田長政に暗殺され、一族が滅ぼされたのは、鎮房が豊前宇都宮氏に伝わる小倉色紙の提出を秀吉に求められて拒んだことも一因とされる。小倉色紙はあまりにも珍重され、価格も高騰したため、贋作も多く流布するようになった。(出典、ウイキペディア)

百人一首と言えば、まずカルタを思い浮



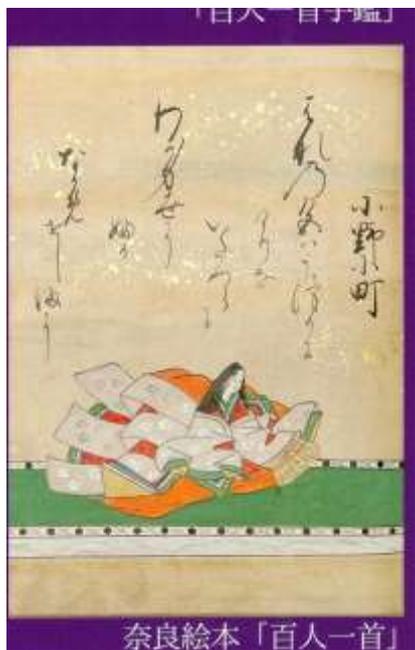
「百人一首」(三条西実隆筆)

かべるが、「百人一首カルタ」で遊ぶようになったのは江戸時代になってからで、それまでは百人一首は「手鑑」「歌仙絵」「奈良絵」などとして受け継がれた。

「手鑑」は代表的な古人の筆跡を集めて帖に仕立てたもので古筆の鑑定用・保存用に作られた。室町時代後期から戦国時代にかけて活躍した公卿・三条西実隆(さんじょう)にしなねたかは能書家としても有名で百人一首の「手鑑」を残している。(左上写真)

「歌仙絵」は三十六歌仙などの肖像を描き、それにその歌人の代表的な和歌と略歴とを書き添えたもの。鎌倉初期から江戸時代にかけて盛行した。百人一首も題材にされた。その後近世に至るまで巻物、画帖(ぶしやう)、扁額(へんがく)などの諸形式にわたって制作され、遺品の数も多い。現在は一首ずつ切断されて諸家に残されているものも多い。

「奈良絵」は室町末期〜江戸初期に奈良の絵仏師によって作られた一種の絵本。御伽(おとぎ)草子を素材に、土佐派風の奈良絵と呼ばれる肉筆彩色画が描かれた。百人一首も題材のひとつ。



奈良絵本「百人一首」

異種百人一首

小倉百人一首の影響を受けて後世に作られた百人一首。以下に代表的なものを挙げる。『新百人一首』

足利義尚撰。小倉百人一首に採られなかった歌人の作を選定しているもの。

『武家百人一首』

17世紀半ばの成立と見られているが、同名の物が複数ある。平安時代から室町時代にかけての武人による和歌を採録。寛文6年刊、榊原式部大輔忠次の撰とされるが、本自体にはその旨の記述はなく、後に尾崎雅嘉が『群書一覽』で比定したものである。また寛文12年、菱川師宣の挿絵、和歌は東月南周の筆で再刊された。菱川師宣の署名した絵入り本の最初とされ、絵師菱川吉兵衛と署名されている。安政5年刊、賞月堂主人の著。明治42年刊、富田良穂撰。神代から幕末までの武将・大名・夫人等の和歌を採録。

『新撰武家百人一首』

18世紀成立、伊達吉村撰。室町時代から江戸中期にかけての武将・大名による和歌を採録している。

『後撰百人一首』

19世紀初頭に成立。序文によれば二条良基の撰、中院関白頭実の補作とするが、後者の存在が疑わしいため成立年代は未定。勅撰集だけでなく、『続詞花集』などの私撰集からも採録しているのが特徴。

『源氏百人一首』

天保10年刊、黒沢翁満編。『源氏物語』に登場する人物の和歌を採録している。その数は1,233人。肖像を入れ、人物略伝、和歌の略注をのせる。和歌は松軒由靖絵は椿斎清福の筆。

『英雄百人一首』

天保15年刊、緑亭川柳撰。神代から室町期までの武人の和歌を採録。

『烈女百人一首』

弘化4年刊、緑亭川柳撰。英雄百人一首に対し、著名な女性の和歌を採録。

『続英雄百人一首』

嘉永2年刊、緑亭川柳撰。英雄百人一首の続編で、平安から安土桃山時代までの武将・大名の和歌を採録。等々。明治の時代以降になつてからも

『義烈回天百首』  
明治7年刊、染崎延房編。幕末の志士等の和歌を採録。

『愛国百人一首』

第二次世界大戦中の昭和17年に選定・発表された。恋歌の多い小倉百人一首に代わって「愛国の精神が表現された」名歌を採録。

『平成新選百人一首』  
平成14年刊、小倉百人一首、愛国百人一首と重複しないように和歌を採録。明成社から歴史的かなづかい文藝春秋社から新かなづかいで出版という企画が巧妙。

以上述べたように、百人一首は百人の歌人の秀歌をまとめたものとして大切にされていた。「百人一首カルタ」で遊ぶようになったのは江戸時代になってからで、一首一首がそれぞれ色紙に書かれていた歌が、戦国時代のスペインやポルトガルなどヨーロッパ文化の流入でトランプのようなカードゲームが紹介されたのち、近



世の初め頃にカルタに作られたようだ。とはいえ、一方で伝統文化を受け継いでいる面も大きい。

百人一首の読み札には、各歌人の肖像が描かれているが、その元は優れた歌人の肖像を描いた「歌仙絵」にある。その後は鎌倉時代にかけて、「似せ絵」が盛んとなり、すでに選ばれていた三十六歌仙の肖像を描き、彼らの代表歌を添えた名品「佐竹本三十六歌仙絵巻」や、後鳥羽院が時代の異なる歌人の歌を対にして作った「時代不同歌合」で歌人の像を描いた絵巻形式のものなどが製作された。これらがやがて伝統となり、百人一首の読み札の形式になったのだらうと考えられる。

一方で取り札は、和歌を色紙に書いた形式に倣ったと見なすことができる。読み札と取り札のうち取り札は一首の後半の下の句だけが書かれているが、文字が変体仮名であるところが現代の物との大きな差である。読み札には、作者として貴族の男性、あるいは女性、または僧が描かれ、その肖像に和歌が加わる。昔の読み札は一首全体でなく、前半の上の句しか書かれていないため、見た目は現代のものより、よほどすっきりしている。



聖徳大学所蔵物  
現在、国内の大学の数校では百人一首のコレクションが盛んであり、東洋大学、慶応大学、玉川大学、跡見

学園、大妻女子大学などのコレクションは知られている。その中で跡見学園女子大学の「百人一首コレクション」は、小倉百人一首から異種百人一首まで3,000点以上の資料を有し、貴重な写本、各種版本、卷子本、錦絵、かるた、双六、注釈・研究書、女性教養書、外国語訳、工芸品など幅広いものであることから、昭和52年に国立国会図書館の「特殊コレクション要覧」に加えられる、日本有数のものとして高い評価を得ている。平成20年、「デジタルアーカイブ化」にも着手し、広く画像の一般公開を行っている。

今回は聖徳大学が所蔵する何点かを聖徳大学8号館の企画ギャラリーで展示するということで見学した。

既述の文章に添えた写真も全て聖徳大学での所蔵物だが、特にカルタについてはカルタの形になる前のものが何種類も展示されていた。貴重なものを見学でき、大変勉強になった。(美崎)

(参考文献)

淡光ムック 百人一首入門  
有吉保・神作光一 監修  
(淡光社)



三十七回短歌の会(最終採択の一首)

九月二十七日実施

ぬっと出てばつと咲きたる彼岸花

師の植えし鉢紅(あか)と白二つ

村上 智雅子

鳴く声ははや法師蟬庭の木々

過ぎ来る風は秋の風かも

納見 美恵子

中学へ弁当たづさへ来し母の

後ろすがたに思わず手合わす

佐々木 侑

人の声絶えて久しき廢屋に

十五夜ついて鈴虫の鳴く

飯高 美和子

餌やりに姿が見えず探す朝

背骨曲がりて泳ぐメダカを

芦崎 敬己

やきもちと思はば思へいかにでも

君の初恋聞きたくはなし

美崎 大洋

痛みなく世話にもならず逝けるなら

もうこれでいい夕の微光

伊奈野 道子

文学掲示板

令和五年一月展示作品(文学の広場)

軽やかに刻めば香る秋茗荷

音にも香にも秋意漂ふ

八千代市 藤川 綾乃

遅れ来し吾を迎へる古き友

好みの肉じゃが頼みくれ居り

我孫子市 美崎 大洋

皿洗う手に水の温もりて

隣家の萩に風そよぐ朝

我孫子市 村上 智雅子

うつし世を忘れ御寺に茶を飲めり

ただ水音と風の声聞く

柏市 納見 美恵子

野火のごとく墓前にむれ咲く曼珠沙華

おもひはきへぬ空しきあのころ

我孫子市 佐々木 侑

早朝の霧雨降りし我が庭に

エサを欲しがる雉鳩(きじばと)の声

我孫子市 飯高 美和子

当会の行事予定

□「放談くわん」

日時 12月11日(日) 14時〜16時

会場 アビスタ第2学習室

講師 村上智雅子氏(当会副会長)

演題 「新田次郎が我孫子で過ごした五年間」

参加費、会員無料、非会員三〇〇円

申し込みTEL:048-8065 佐々木まで

(8ページ「あびこだより」参照ください)

□ 手賀沼統一クリーンデー(第20回)を実施

日時 12月4日(日)、午前8時30分〜(雨天中止)

場所:我孫子会場「手賀沼公園多目的広場」

(アビスタ南側の広場)

実施内容 「手賀沼ふれあい清掃」と合同で実施

① ふれあいライン根戸新田歩道周辺のゴミ拾い

② 手賀沼公園周辺の外来水生植物駆除

(参考)・印西、柏、白井でも同日または他日実施

主催:美しい手賀沼を愛する連合会(略美手連)

(我孫子の文化を守る会も会員です)

美手連会員は右記実施内容の②外来水生植物駆除を

担当します。

プロジェクト「短歌の会」

第三十八回短歌の会

日時 11月29日(火) 13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

□ 市民のチカラまつり

講演会と史跡巡りでの参加

講演会

日時 令和5年2月4日(土) 13時〜17時

場所 近隣センター「ふさの風」

前回会報にて日程の変更、実施日未定とお知らせ

しましたが、会場確保の関係で来年実施になりました。

詳細は来年1月の会報にて掲載します。

(中止)2022年度手賀沼流域フォーラム

「川めぐりと木下の史跡散歩」

10月7日(金)に予定していた標記イベントは当日の

悪天候のため中止となりました。楽しみにされていた

方には申し訳ありませんでした。また事前の準備に多

大な努力をされた担当者・関係者にお礼を申し上げます。

来年度は予備日(代替日)を検討したい。

編集後記今回、初めて美手連の活動を掲載した。従

来から当会から役員が理事会と運営委員会に出席し

ているが会議の詳細を報告することはなかった▼手賀

沼のハスが最近全滅(枯死)した。原因は不明である。美